

## 現象描写文と発話の場 — (ILYA) 「名詞句+関係節」の分析を中心に—

津田洋子 (京都大学人間・環境学研究科 研修員)

フランス語には、統語的には「名詞句+関係節」でありながら、たった今話し手の目の前で起こった事態を表す、現象描写文と呼ばれる文タイプがある(1)。この文タイプは、(2)のような通常の「主語+述語」で表される文タイプと異なり主動詞を持たない。そのため、文としての成立をめぐる様々な議論がなされている。

(1) Le facteur qui passe !

(2) Le facteur passe.

まず、Grégoire(1949)において、この文タイプは« un type de phrase méconnu »として、日常的な話し言葉で用いられるにもかかわらず、文としての研究がされてこなかった事実が指摘される。そして、(1)の文タイプは、(3)のような提示詞を伴う表現の省略形ではなく、大変便利な一つの文タイプを選択肢として提供していると主張される。

(3) {C'est / Il y a / Voilà} le facteur qui passe !

この論文をうけ、Pottier(1949)においても、(1)の文タイプは自然発生的な文として捉えるべきとしたうえで、(1)を知覚の反応に関わる主観的な文、(2)を客観的な文として区別する必要性が指摘される。そして、(1)の文タイプにおいて含意される知覚動詞 « Je vois »などの代わりに、{C'est / Il y a / Voilà}のような « formules passe-partout » (用途の広い表現)を用いて、(3)のように構文としての形式が整えられるとされる。

その後(1)のような文タイプは、(3)のような提示詞を含む文タイプや、主動詞として知覚に関わる動詞を含む文タイプとの関係をもとに様々な考察が行われてきた (Rothenberg 1971, 1972, 1979 ; Radford 1975 ; Cadiot 1976 ; Kleiber 1981, 1988 ; Muller 1995, 2001 ; Furukawa 1996, 2005, 2013)。

本発表においては、{C'est / Il y a / Voilà}「名詞句+関係節」の文脈との共起関係をもとに、どのような文脈において「名詞句+関係節」が文として成立しているかを吟味する。そのうえで、「名詞句+関係節」が、どのように不足している要素を補填し文として成立するかを説明する。